

『三葉集』

田漢・宗白華、郭沫若著

その1 「郭沫若より宗白華への手紙」 (原題：「郭沫若致宗白華」)

顧 文*

岩佐 昌璋**

Kleeblatt by Tian Han, Zong Baihua & Guo Moruo

Letters to Zong Bai hua from Guo Moruo No. 1

With Annotation

by

GU Wen, IWASA Masaaki

(Received October 31, 2012)

白華さん：

僕の詩は、本当に君の最も愛読するものでしょうか？僕の詩は、本当に君が認めてもよいと思う詩でしょうか？【補注1】本当なら僕は真に歓喜極まりといった気分です！ただ君が自分の詩稿を形にしないままずいぶん葬りさっていたと聞き、僕は自分のためにとても残念です【補注2】。というのは君の詩はきっと僕の最も愛読するものでもあるし、またきっと僕が認めても良い詩だろうと思うからです。凡そ芸術家というものは彼自らが生み出したものを、必ずや慈母が赤子を愛しむように、十分に愛惜するはずです。それなのに君はなぜ自分の作品をそんなに冷酷に、そんなに粗末に扱うことができるのでしょうか？あるいは君は独善主義を取っていて、作品を披露して、僕たちに安らぎを得させたくないのでしょうか？僕は、自分たちの詩がただ自らの心中の詩意、詩境の純真な表現、命の泉から流れ出した Strain¹、

心の琴から奏で出した Melody²、生きている顫動、靈魂の叫びでありさえすれば、それこそ本当の詩であり、良い詩であろうと思います。すなわちそれらは僕たち人類の喜びの源泉であり、陶醉の美酒であり、慰安の天国だと思うのです。僕はこんな詩に出会うたびに、新体詩でも、旧体詩でも、今の人のものでも、或いは古人のものでも、我が国のものでも、外国のものでも、もしできることなら、いつもこれらを本ごと、紙ごと飲み込んでしまいたい。それらのものを僕の筋骨にまで溶け込ますことが出来ないのがいつも残念で仕方ないのです。僕は、君の詩はきっと僕らの心中の詩境、詩意の純真な表現であり、

この手紙は1920年2月1日上海『時事新報・学灯』に最初に発表された。また同年3月15日に出版された『少年中国』第1巻第9期に連載されている。後に作者の修訂を経て、「論詩」という題目で『文芸論集』（1925年12月上海光華書局出版）に収録されている。また1959年人民文学出版社の『沫若文集』第10巻に「論詩三札・二」という題で収録されている。

* 東海大学総合経営学部マネジメント学科教授

** 九州大学名誉教授 熊本学園大学教授

¹ 英語：曲調【ふし、曲】

² 英語：旋律【メロディ】

きつと僕らの筋を融かし、骨を溶かすことができる「真の詩」、「良い詩」に違いないと思います。君はなぜそんなにもつたいないことをするのですか？それらの詩を形にしないうちに消滅させていくのですか？君は「僕らの心中には詩境、詩意がなければいけないが、しかし必ずしも詩を作る必要はない」と書いています。それはむしろ間違っていないと思います。ただ僕から見れば、君はまだ少し自分の考えに拘っている所があると言わざるを得ません。何といったらいいか、僕の考えでは、詩のようなものはおそらく「作」ってできるものではないのです。君の詩もきつと作り出したものではないと思います。シェリー¹のある言葉がよく言い当てていると思います。A man can not say: I will compose poetry²【補注3】。ゲーテも言ったことがあります。「自分は詩興が湧いてくるたびに、すぐ書卓のそばに走っていき、斜めになっていた紙をまっすぐに返す時間もなく、そのまま急いで最初から最後まで直立しながら書き続けたものだ」³と。ゲーテのこの経験はまさしくシェリーの言葉を実証したものだと思えます。詩は「作」ってできるものではない、ただ書き出すものである！詩人の心境は一湾の清澄な海水のようだと僕は思います。風のないときには、静止していて、一枚の鏡のように、宇宙万物の印象のすべてをそこに映しています。一旦風が吹くと、たちまち波が翻えり、浪が涌き立ち、宇宙万物の印象のすべてがそ

の中で活動するのです。この風はすなわち所謂直感、靈感（Inspiration）です。この涌きだした波浪は高揚している情調です。この活動している印象は往き来している想像です。これらのものが、すなわち詩の本体であると僕は思います。これらを書き出しさえすれば、「体相兼備」【詩の本体とその表現が兼ね備わる】のです。大波大浪の大きなうねりは「雄渾」【晚唐詩人・司空図著『二十四詩品』に見える】な詩となり、屈原の『離騷』⁴、蔡文姬⁵の『胡笳十八拍』、李杜⁶の歌行、ダンテ Dante⁷の『神曲』、ミルトン Milton⁸の『樂園』、ゲーテの『ファウスト』となるのです。小波小浪の波紋は「沖淡」【あっさりして、淡泊。晚唐詩人・司空図著『二十四詩品』に見える】な詩となり、周代の国風⁹、王維¹⁰の絶詩、日

⁴ 屈子、屈原（約前340—約前278）のことを指す。名は平、戦国時代の楚国人、詩人。著作『離騷』は長編抒情詩である。

⁵ 蔡文姬、また昭姫ともいう。名は琰、陳留圉（今河南省杞県南）の人。漢の末期の女性詩人。『悲憤詩』五言及び騷体の各一首を、琴曲歌辞の『胡笳十八拍』を作ったと伝えられている。【郭沫若には彼女を主人公にした劇曲『蔡文姬』（1959）がある。】

⁶ 李白と杜甫を指す。李白（701—762）、字は太白、原籍地隴西成紀（今甘肅秦安）。碎葉（今バルハシ湖の南に流れる楚河流域）に生まれる。杜甫（712—770年）、字は子美、河南省鞏県の人。この二人は唐代の大詩人で、古代の民間歌謡を集めた樂府体を用いて多くの詩を作っていた。通称「樂府歌行」。

⁷ ダンテ（Dante Alighieri, 1265-1321）、イタリアのルネサンス期の詩人。長詩『神曲』はその代表作である。

⁸ ミルトン（John Milton, 1608-1674）、英国詩人、政論家。『失樂園』【Paradise Lost, 1667】、『復樂園』【Paradise Regained, 1671】、と『闘士サムソン』【Samson Agonistes, 1671】の三部長詩を著す。『樂園』は『失樂園』を指す。

⁹ わが国最古の詩歌集『詩経』の一部であり、周の早期から春秋中期まで十五地方の民謡を収集しており、総計一六〇篇がある。

¹⁰ 王維（701—761、一説に698—759）、字は摩詰、原籍地祁（今山西祁県）で、その父は蒲州（州府は今山西永濟西）に移り住み、そのまま河東人となった。唐代詩人、画家。彼の五言絶句山水詩の到達点は頗る高い。『王右丞集』を著す。

¹ 英国詩人（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）、代表作として長詩『イスラムの反乱』【The Revolt of Islam, 1818年】、詩劇として『縛を解かれたプロメテウス』

【Prometheus Unbound, 1820年】、抒情詩として『西風に寄せる歌』【Ode to the West Wind, 1819年】『ひばりに寄せて』【To a Skylark, 1820年】がある。

² 英語。『沫若文集』で筆者自身が、「シェリーにとてもうまく表現した言葉がある：「人は、私は詩を作るぞ、とは言えない」というものだ」と訳している。この言葉はシェリーの『詩の防衛』【A Defence of Poetry, 1821年】に見える。

³ この言葉は、ゲーテの「エッケルマンとの対話」、1830年3月14日によるもの【J.P.Eckermann, 1792-1854】。朱光潜訳『ゲーテ談話録』人民文学出版社1980年版第207頁に見える。

本の古代詩人西行上人と芭蕉翁の歌句¹、タゴール²の『新月』となるのです。これらの詩の波瀾には自然の周期と振幅 (Rhythm) があり、詩を書く人にいささかの作為もさせないし、一瞬のためらいさえ許しません。まさしくゲーテの言うように、紙をきちんと整える時間さえも与えてくれないのです。ここまで書いてきて、詩というものを一つの方式で表示できると思うようになりました。

詩＝ (直感+情調+想像) + (適切な文字)

Inhalt³

Form⁴

このように見ますと、詩という概念に含まれる属性からは人と芸の問題が生まれます。Inhalt (内容) はすなわち人の問題、Form (形式) はすなわち芸の問題です。要するに僕は君が教えてくれた二つの言葉に敬服しています。君は僕に、こう教えてくれました。一方では大いに自然と哲理に接近して、円満で高尚な「詩人の人格」を涵養すること。もう一方では、古今の天才の詩の中にある自然な音節と自然な形式をよく研究して、「詩の構造」を完全なものにすること。白華兄！君のこの二つの言葉を僕は本当に骨身に刻んで忘れません！君はこんなにすばらしい見解を持っているのです。ですから僕は信じているのです。君の詩はきっと良い詩であり、真の詩であります。僕は切に希望しています。今後、君は詩を書き出した時、絶対に捨てたりしないで下さい。それを発表し、僕たちに少しでも安らぎを与えるべきなのです！

しかし、白華兄！僕が一体どのような「人間」な

のか？おそらく君はまだ十分にご存知ありません。君は僕には Lyrical【叙情的】な天分があると言いましたが、僕自身はそれを知るよしありません。しかし僕自身の人格は実にひどく悪いのです。僕は Goldsmith⁵より墮落しており、Heine⁶より悩み多く、Baudelaire⁷より退廃していると思います。僕は君の「詩人の人格」についての言葉を読んだ時、早々にさめざめと涙を流してしまいました。僕も以前旧詩を作ったことがあります。ここではひとまず二、三首を書いて、君に見てもらいたいと思います。

尋死 (筆者注：四年前旧作)

出門尋死去、孤月流中天。寒風冷我魂、孽恨摧吾肝。
茫茫何所之、一步再三嘆。画虎今不成、芻狗天地間。
偷生実所苦、決死復何難。痴心念家國、忍復就人寰。
歸來入門首、吾愛淚洩瀾。

【門を出でて死を尋ねて去かば、

孤月、中天に流る。

寒風 我が魂を冷たし、孽恨 我が肝を摧く。

茫々として何れの所にか之かん、

一步して再三嘆く。

虎を書くとも今成らず 芻狗 天地の間。

生を偷みて実に苦しむ所

⁵ ゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1730-74)、英語作家。長詩『寒村行』【The Deserted Village】と小説『ウェイクフィールド牧師』【The Vicar of Wakefield】を著す。作品の多くは濃厚な感傷的な情調を帯びている。

⁶ ハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856)、ドイツ詩人、ユダヤ血統を持つ。若いころ、封建専制の仰圧をうけて、苦悩し、感傷的な日々を送る。シリーズ詩『青春の苦悩』【Youthful Sorrows】を書いた。1830年フランス七月革命の後、彼の進歩的な思想と創作は社会に受け入れず、パリへの遷居を迫られ、終身亡命生活を送る。『ドイツ：冬物語』【German: A Winter's tale, long poem】、『シレジアの職工』【Weavers of Silesia】を著す。

⁷ ボードレー (Charles Baudelaire, 1821-1867)、フランス詩人。象徴派詩歌の先駆者。代表的な詩作には『悪の華』【The Flowers of Evil】があり、酒色と死を謳歌し、色濃く退廃的な感情を呈している。

¹ 西行 (1118-1190)、日本中世の歌人。元は佐藤氏豪族の一族に属する。最初頃朝廷に奉職し、出家後、名前を西行上人と改める。短歌を多く作っている。『山家集』を著す。芭蕉翁、即ち松尾芭蕉 (1644-1694)、日本江戸時代の俳人。日本短歌の新詩体——十七音の俳句を作り出した。『芭蕉七部集』を著す。

² タゴール (Rabindranath Tagore, 1861-1941)。インド詩人、作家、哲学者。『新月集』【The Crescent Moon, 1913】、『飛鳥集』【Stray Birds, 1916】等を著す。

³ ドイツ語で、「内容」。

⁴ ドイツ語で、「形式」。

死を決するも また何ぞ難^{かた}からん。
痴心 家^か国を念じ、忍びでまた人寰^あに就く。
帰り来たりて門首に入れば、
我が愛 涙 瀾^あに洩る。】

夜哭 （筆者注：三年前旧作）

憶昔七年前、七妹年猶小。兄妹共思家、妹兄同哭倒。
今天我之涯、淚落無分曉。魂散魄空存、苦身死未早。
有国等於零、日見干戈擾。有家歸未得、親病年已老。
有愛早摧殘、已成無巢鳥。有子才一齡、鞠育傷懷抱。
有生不足樂、常望早死好。万恨摧肺肝、淚流達宵曉。
悠々我心憂、万死終難了。

【憶えば昔 七年前、七妹の年猶小^{わか}
兄妹共に家を思い、妹兄同じく哭き倒る。
今 我 天の涯に、涙落ちて分曉なし。
魂散じて、魄空しく存ず。
身の死することいまだ早からざるに苦しむ。
国有るも零きに等し、日に干戈の擾^{さわ}ぐを見る。
家有るも帰ることまだ得ず、
親 病みて年すでに老いたり、
愛有るも早くも摧殘し、すでに無巢の鳥となる。
子有り 才^{わずか}に一歳、鞠育 懷抱^{やぶ}を傷る。
生有るも楽しむに足らず、
常に早く死するの好きを望む。
万恨 肺肝に摧^{くだ}き 涙流れて 宵曉に達す。
悠々たる我が心の憂い 万死 終に了^{つい おわ}り難し。】

春寒 （筆者注：昨年作）

凄凄春日寒、中情慘不歡。隱憂難可名、対兒強破顔。
兒病依懷抱、咿咿未能談。妻容如敗草、浣衣井之闌。
蘊淚望長空、愁雲正漫々。欲飛無羽翼、欲死身如癱。
我誤汝等耳、心如万箭穿。

【凄凄として 春日寒し 中情 慘として歡ばず
隱憂名づくべきこと難く 兒に對して、
強いて顔を 破^{はこ}ばす。
兒病みて 懷抱に依るも
咿咿として談ずること能わず

妻容 破草の如く 衣を井の闌^{あら}に浣う。
涙^{ため}を蘊て 長空を望めば
愁雲 正に漫漫たり。
飛ばんと欲するも羽翼無く、
死なんと欲するも身癱の如し。
我 汝らを誤らすのみ、
心 万箭の穿つが如し。】

白華兄！このような詩は、おそらく君が愛読するものではありませんまい、おそらくこのような詩は、君が認める詩ではないでしょう！「尋死」という詩は、曾慕韓兄以外の第三者には見せたことはありません。慕韓兄、彼は僕のことをよく知っています。ああ！もうこれ以上これらのクダラナイもので、君の心情を乱すことには耐えられません。

僕は数日前ようやく友達の所から『少年中国』²第一、二期を借りてきて読んでみました。いくつかの感懷を詩にしました。

僕が『少年中国』を読んだ時、僕は僕の学友の若者たちを見た、一人ひとりが天上の明星のようだ。僕は独りこの Stryx に陥入った amoeba³、ただ無意識に蠕動しているだけ。

ああ！僕は僕の涙の湖の中の波濤が湧きあがるのを抑えきれなかった！

慕韓、潤嶼、時珍、太玄はみな僕の昔の学友です⁴。

¹ 即ち曾琦（1892－1960）、四川隆昌県人。少年中国学会の発起人の一人で、後に中国青年党のリーダーとなる。

² 少年中国学会の会誌。1919年7月15日に創刊。月刊誌。はじめ頃北京の王光祈、李大釗、康白情等人が編集をしていたが、第五期以後、上海に移り、上海亜東図書館が印刷と発行を代行し、1924年5月第四卷第十二期で停刊となった。

³ Stryx と amoeba はラテン語。Stryx、ステカスはギリシャ神話中の冥河で、地獄との境界線でもある。この河を渡れば死の靈魂の国に至る。Amoeba、アメーバ、変形虫。

⁴ 潤嶼、即ち王光祈（1892－1936）、筆名は若愚、四

僕は彼らに対し、本当に自分の醜さを恥ずるばかりです。まさに amoeba にさえも及ばないのです！ああ！要するに、白華兄、僕は「人」ではない、僕はダメになった人間です。僕は君が「敬服」するに値しない人間です。僕は今までと Phoenix¹ のようになりたい。香木を拾い集めて、僕の今もっている形骸を焼却し去り、哀切な挽歌を歌いながら、すべてを焼却し去り、その清く冷たくなった灰の中から「僕」を再生させたいのです。しかし、それもついには一つの幻想に終わるのではかと恐れているのです！

田寿昌【田漢】兄はまさに『少年中国』の中で知り合いました。彼は早くからあんなにホイットマン² を崇拝していました。おそらく彼こそ「我が国の新文化の真の詩人」にふさわしい人です。福岡は東京までとても遠く、汽車で三日間もかかり、彼を訪ねることはできません。しかし、僕は今後彼と文通するつもりでいますので、君から僕に話したことはすべて彼に一つ一つ伝えておきます。

僕は常に天才の発展には二種類の Typus³ があると思っています。一種は、直線的な発展であり、もう一種は、球形な発展です。直線的な発展はその特異な天分を原点とするものであり、物事を深めればさらにその奥を求め、磨けばさらに向上に向上を重ねて、一つの方向へますます延びて、その延ばせる所まで延びていく。例えば純粋な哲学者、科

学者、教育者、芸術家、文学者……すべてこの類型に属します。球形な発展は、その生まれつきのすべての才能を同時に四面八方へ、立体的に発展させていきます。この類型に属する人は僕には二人しか見つけられません。一人はわが国の孔子⁴であり、もう一人はドイツのゲーテです。

孔子という大天才は政治家と見なせば、彼はそれなりの「大同」主義を持っています；もし哲学者と見なせば、彼自身の Pantheism【汎神論】の思想を持っています；教育者と見なせば、彼の「有教無類」【いかなる人にも等しい教育を与える】⁵、「因材施教」【その人に適した教育を施す】⁶という Kinetisch⁷ 的な教育理念を持っています。科学者と見なせば、元々、彼は博物学者であり、数理に通ずる人でした。芸術家と見なせば、元々、彼は音楽に精通していました。文学者と見なせば、彼には確かにシンプル、かつ精細な文学があります。文学の上での功績を簡単に申しますと、孔子という存在は、断然無視することは困難です！彼は『詩経』『書経』を添削したり、『春秋』に手を加えたりして⁸、中国の古代文化に系統的な存在を持たせてくれました。僕から見れば、彼のこの偉業は、絶倫の精力、審美的な情操と芸術

川温江県人。少年中国学会の発起人の一人である。時珍【王光祈と同じ船で渡独。理数学専攻】、即ち、魏嗣鑾、四川蓬安県人。少年中国学会会員。太玄、即ち周太玄（1895－1968）、元の名前は周焯、又周無ともいう。四川新都県人。少年中国学会の発起人の一人である。以上の人たちは、みな郭沫若の成都高等学堂分設中学塾時代の学友である。

¹ 英語。フェニックス。古代エジプト伝説中の不死鳥。500年間で死から生き返る。

² ホイットマン (Wlat Whitman, 1819－1892)、アメリカ詩人。詩集『草の葉』【Leaves of Grass】等を著す。田漢は『平民詩人ホイットマン百年祭』という文章を書いて、1919年7月15日の『少年中国』第一巻第一期に連載している。【ここではそのことを指している。】

³ ドイツ語。『沫若文集』で作者は、「類型」と訳している。

⁴ 孔子（前551－前479）、名は丘、字は仲尼、春秋時代魯国陬邑（今山東曲阜）人。儒家学派の創始人。次の文に彼の「大同」思想に言及している。『礼記・礼運篇』に見える。

⁵ 『論語・衛霊公』に見える。

⁶ 『論語・雍也』に「子曰：『中人以上、可以語上也。中人以下、不可以語上也。』」【子曰く：中人以上は、以て上を語るべきなり。中人以下は、以て上を語るべからず。】とある。宋代朱熹は『論語集注』でこの言葉を「因材施教」だと総括している。

⁷ ドイツ語。『沫若文集』で作者は、「動態的」と訳している。

⁸ 『詩』とは、『詩経』を指す。『史記・孔子世家』によれば、『詩経』三百編は孔子が編纂したと言う。『書』とは、『尚書』を指す、古く『書経』と呼ぶ。中国の殷周から春秋時期までの「記言」【言葉を記録する】体となる古代歴史書で、一百篇余りがある。孔子がこれらを編集し、そのために序を作ったと言われているが、恐らく信憑性に欠けている。『春秋』とは周代魯国の「紀事」【出来事を記録する】体となる編年体の歴史書。今流布している魯『春秋』は孔子が修訂したものである。

批評家の絶妙な手腕がなければ、それこそ望んでもやり遂げられるものではありません。僕は常々わが中国に再び『国風』を編纂する人物が生まれ——或いは多数の人で一つの機関を組織して——わが国の各省、道、県、村の民風と俗謡を集め、その精粹を一つの『新国風』に編纂してほしいと望んできました。必ず「民衆芸術の宣伝」になり、「新文化建設の運動」の一助けにもなると思うのです。僕たちは、民衆芸術を宣伝しよう、新文化を建設しようとはしますが、先に国民の情調を基点としないで、ただいくつかの外国人の言論紹介を図ったり、或いは一個人の根拠のない考えを発表したりするだけで、まるで鑿（のみ）と柄【え。柄（穴）の誤りか？】の全く相容れないようなものになっています。話がまた脇道にそれました。孔子に戻しましょう。孔子のような人は最も理解されにくいと思います。彼を賛美する立場にいる人々たちから見れば、彼は「其大則天」【その大きさ、すなわち天】¹であり、彼を軽視する立場にいる人々たちから見れば、彼は「博学而無所成名」【博学なれど名を成す所無し（博学ではあるが何か一つの専門で名を成していない）】²です。僕はこの二つの評価は両方とも正しいと思います。ただ僕たち自身の立脚点がどこにあるかによるです。しかし、どうしても孔子を「宗教家」、「大教祖」、或いは「中国の罪魁」【中国の諸悪の元凶】、「盗丘」【盗儒】だと言いなすなら、それは余りにも古人をおとしめすぎ、未来の人を欺くことだと言わざるをえません。

ゲーテのような天才もついに「博学而無所成名」の地位に到りました。彼は解剖学の大家（解剖学の中のいくつかのものが彼によって発見されています）であり、理論物理学の研究者（彼は色素研究をしており、ニュートンと論争したことがあります）、絵画音楽に関しても通じない所がありません。彼にはKonkursordnung（破産法条例）についての見解があり、政治家と外交家の能力と経験があり、Lavater

と Knebel とも彼はヒーローだと賛美しています³。蓋世の偉人であるナポレオン一世さえも彼のことを「Voila un homme」だと激賞しているほどです⁴。彼には彼の哲学があり、彼の倫理があり、彼の教育学があります。彼はドイツ文化を支える大黒柱であり、近代文芸の先駆けです。・・・彼という人もまた確かに最も理解されにくい人物です。同時に彼は Faus, Gott, Uebermensch⁵であり、Mephistopheles, Teufel, Hund⁶です。だから Wieland が「Goethe wuerde darum verkannt, weil so wenige faehig, seien, sich einen Begriff von einem solchen Menschen zu machen.」⁷【ゲーテは、そのような人間（ゲーテのような人間）を理解できる人が、非

³ ラーヴァタ (Johann Kaspar Lavater, 1741 - 1801)、スイスの神学者、哲学者。クネベル (Karl Ludwig von Knebel, 1744-1834)、ドイツの翻訳家、詩人。彼らはゲーテを賞賛する言葉は、ビルショフスキ

(Bielschowsky) の『ゲーテ伝』【The life of Goethe】第一篇（宗白華が『ゲーテ論』と訳したものを1933年1月南京鐘山書局の初版『ゲーテの認識』に収録）に見える。

⁴ ナポレオン一世 (Napoleon I, 1769-1821)、フランスブルジョア階級の政治家、軍事家で、フランス第一帝国と百日王朝の皇帝である。フランス語の「Voi là un homme」で、「これは一人の人である。」という。【英語では「Here is a man」、「一人の男」だと訳す】。この言葉は、『沫若文集』で作者は「ナポレオン一世さえも彼の著作と人格を激賞している」と改めている。

⁵ ドイツ語。『沫若文集』で作者は「ファウスト、神、超人」と訳している。

⁶ ドイツ語。『沫若文集』で作者は「メフーストフェレス、悪魔、狗」と訳している。メフーストフェレスとは、ドイツの民間伝説とゲーテの『ファウスト』中の悪魔である。

⁷ ドイツ語。『沫若文集』に作者は「ウイーラントはゲーテが人に誤解されるのだろう、なぜならば、この種の人の概念を把握できる人は本当にわずかしかないから」と訳している。ウイーラント (Christoph Martin Wieland, 1733-1813) とはドイツ作家で、ドイツの後啓蒙主義運動の主要な代表である。『アーガトン物語』【The Story of Agathon】、『アプデラの人々』【A very probable history of the Abderetes】と『オーベロン』【Oberon】著す。この言葉と次の言葉「人中的至人」は、宗白華訳のビルショフスキ著『ゲーテ論』に見える。

¹ 『史記・孔子世家』に「顔回曰：『夫子之道至大、故天下莫能容』」顔回曰く：「夫子の道、至大なり、故に天下能く（夫子）を容れるところ莫し」

² 『史記・孔子世家』に見える。

常に少なかったために誤解された】といったのです。僕はこの言葉は孔子にもあてはまると思います。Wieland はまたゲーテは「**Menschlichste aller Menschen**」【すべての人の中でもっとも人間的な人である】とっています。この言葉はおそらく「人の中の至人」と訳せます、その概念はやはり把握しにくいものです。しかし、それはわが国の「大誠至聖先師」¹などの徽号【尊号】より更に妥当で、実際的であると思います。

ゲーテは一人の「人間」であり、孔子も一人の「人間」であるに過ぎません。孔子は南子に会おうとしました²、『淫奔之詩』も削除しませんでした【孔子は『詩経』編纂の際の、鄭国の詩を「淫」と批判しながら削らなかった】。僕はおそらく彼はそれを愛読したと思っています。僕から見れば彼は自由恋愛を主張し（人情之所以不能已、聖人不禁【人情の已むこと能わざる所以は、聖人も禁ぜず】）³、自由離婚（孔氏三世出其妻【孔氏三代その妻を出す】）を実行した人です。孔子とゲーテらは本当に「人の中の至人」だと言える人たちです。彼らの霊魂と肉体は両方ともすべてが完璧な地点まで発展しました。孔子の力量は「国門の関を拓くことができ」ました。彼は決して紙くずの山の中で生きるすべを探す Buecherwurm⁴ではありませんし、人の唾を納めることしかできない臭い痰壺でもないのです！

僕は詩人と哲学者の共通点は共に宇宙全体を対象とし、万事万物の核心を透視することを天職とする

ことにあると思います。ただ詩人の利器は純粹な直感だけですが、哲学者の利器はさらに一種の精密的な推理を加えることにあります。詩人は感情の寵児であり、哲学者は理智の「干家子」【達人】です。詩人は「美」の化身であり、哲学者は「真」の具体です（これらの言葉はむしろ君のご叱正を請うものです）。しかし、哲学中の Pantheism【汎神論】は確かに理智を父に、感情を母にしている優れた子なのです。その upholsterer⁵がはめ込んだ死の宇宙観に満足しない哲学者は、自然に Pantheism に傾斜していき、自ら宇宙全体を新たに一つの生命体、活動性のある有機体と見なすのでしょうか。どんな人であろうとも、すべて理性をもつ動物です。どんな人であろうとも、みんな自分の宇宙観と人生観をもっています。詩人は感情の寵児ですが、彼らにも彼らの理智があり、自分の宇宙観と人生観を持っています。だとすれば、当然、君が言われたように、「詩人の宇宙観は Pantheism が最もふさわしい」のです（君の言う「宇宙観」の中にはもちろん「人生観」を包括しています）。ですから、君が書こうとしている「ドイツ詩人ゲーテの人生観と宇宙観」を、僕は本当に真っ先に読んでみたいのです！ゲーテは単純に詩人だとは言えませんが、しかし彼の全人格を覆っている Strahlenkranz⁶の中で、詩人の光彩がその大部分を占めているのです。ゲーテの宇宙観と人生観について、精密な分析、具体的な研究を行ったことはありませんが、彼は確かに Pantheist【汎神論者】だと思います。彼は Spinoza⁷を最も崇拝しています。彼は若い（二十四歳）頃、何の気なしに Spinoza の本をみつけ出して読んでいます——本の名前は思い出せませんでしたが、思うにもちろん Spinoza の

¹ 明世宗（朱厚熜）は嘉靖九年（1530年）孔丘に「至聖先師」の称号を与えた。清世祖（愛新覺羅・福臨）は順治二年（1645年）に「大成至聖文宣師」という諡号を改めて贈っている。「大誠」は「大成」とあるべき。

² 南子、春秋時期衛靈公の夫人。「子見南子」（子、南子を見る。）は『論語・雍也篇』による。【南子とは、不品行と淫乱の婦人だという評判があるが、にも関わらず、孔子は衛の国で、この婦人に謁見したという話を指す。】

³ 漢・楊惲の『報孫会宗書』による。「夫人情所不能止者、聖人弗禁」【夫（そ）れ人情の止（とど）むること能（あた）わざる所の者は、聖人も禁ぜず。】とある。

⁴ ドイツ語。『沫若文集』で作者は「蠹魚（しみ）」と訳している。

⁵ 英語。『沫若文集』で作者は「室内装飾」と訳している。

⁶ ドイツ語。『沫若文集』で作者は「光輪」と訳している。

⁷ スピノザ（Baruch,後に Benedictus, Spinoza, 1632-1677）、オランダの哲学者、汎神論の代表人物の一人である。『神学政治学論』【A Theologico-Political】、『倫理学』【Ethica ordine geometrico demonstrata】、『人間知性改善論』【Tractatus intellectus emendatione】等を著す。

Ethica cum geometricum¹【『実証倫理』】でしょう——彼は大いに喜びました。彼はこのときほど精神上の慰安と明快を感受したことはないと言っています。この事実は彼の自伝 *Dichtung und Wahrheit*²の第四部第十六巻の中に書かれています。この書は残念ながら僕の手元にありませんので、ゲーテ自身の言葉をそのまま引けません。本当に申しわけありません。スピノザの *Ethik*³について、僕の記憶では Hoffding⁴の「近代哲学史」【A brief history of modern philosophy、1919】の評語に、それは一つの芸術作品であり、一つの Drama⁵であると書いています。僕はこの言葉はまさに「詩人の宇宙観は Pantheism【汎神論】が最もふさわしい」という事の反面を表していると思います。スピノザ時代の Pantheist【汎神論者】については、言うまでもありませんが、ゲーテがスピノザの感化を受けていたのも一種の明らかな事実です。ですから君の考えたゲーテと僕の意中のゲーテはぴったり一致したのです。ただ僕はゲーテの作品に対して、精密な分析と詳細な研究をあまりしていませんでした。君は彼についての研究論文をまもなく書き上げます。なんと嬉しいことではありませんか。ゲーテの著作に関して、僕たちは出来るだけ多く紹介し、研究すべきであると思います。彼の生きた時代——「脅迫時代」⁶——は

¹ ラテン語。『沫若文集』で作者は「スピノザの『幾何学式の倫理学』と訳している。原書の名前は「Ethica ordine geometrico demonstrata」である。

² ドイツ語。『沫若文集』で作者は『『文と質』、即ち『詩と真実』と訳している。【From my Life: Poetry and Truth 1811-33、私自身の人生から得た：詩と真実 1811-33】

³ ドイツ語。『沫若文集』で作者は『『倫理学』と訳している。

⁴ ホッフディング（1843-1931）、デンマークの哲学者。

⁵ 英語。『沫若文集』で作者は「劇本」と訳している。

⁶ 『沫若文集』本で「狂飆時代（疾風怒濤の時代）」と改めている。18世紀70年代から80年代まで「封建制度」と「偽善道德」に反対することを、ドイツのブルジョア階級文学運動の内容としている。ドイツ劇作家のクリンガーが劇本『シュトルム・ウント・ドランク』によって名声を得る。なおゲーテとシラーらとは共にこの運動に参加している。

僕たちの時代ととても似ています！僕たちには彼の教訓を受けとめるべき所が沢山あります！

僕に「詩人と Pantheism との関係を説明できる」詩を書くようおっしゃっていますが、白華兄！僕は本当に恥をさらす勇気がないのです。この種の詩は、タゴールの英訳詩の『A Hundred Poems of Kabir』⁷の中のものが、一首一首まさにそれです。できる限りそれを引用すべきだと思います。最近李太白の詩集をもう一度読んでみました。彼の「日出行」という詩を新詩体の様式【行分けし、句読点、疑問符、感嘆符などを加えること】を用いて、書き出して見ました。

日出東方隈、
似从地底来、
歷天又復入西海；
六龍所舍安在哉？
其行終古不休息、
人非元氣、
安能【李白の原文は「得」】与之徘徊？

草不謝榮於春風。
木不怨落於秋天。
誰揮鞭策驅四運？
万物興歇皆自然！

羲和！羲和！
汝奚汨沒於荒淫之波？
魯陽何德：駐景揮戈？
逆道違天、矯誣実多！
吾將囊括大塊、
浩然与溟滓同科！

【日は東方の隈に出で、
ちてい
地底より来たるに似たり、
天を歴て、又た再び西海へ入る；

⁷ 英語。『カビール百吟』。カビール（Kabir、1440-1518）、インド詩人と禅学者。『五千頌』【不詳】、『羅摩尼』【ラマイニ】を著す。

りくりゅう やど いず
六 龍の舍る所は、安くにか在る？
その行、終古と休息せず、
人は元気に非ずんば
いずくんぞそれと久しく徘徊するを得ん？

えい
草は榮を春風に謝せず。
木は落つるを秋天に怨まず。
べんさく ふる
誰か鞭策を揮って、四運を駆る？
こうけつ
万物興歇、みんな自然！

ぎ わ
義和！義和！
なん
汝 奚ぞ荒淫の波に汨没するや？
こつぽつ
魯陽 何の徳か：景を駐め 戈を揮う？
たが きょうぶ
道に逆らい、天に違い、矯誣実に多し！
吾、將に大塊を囊括し、
めいこう
浩然として溟滓と科を同じうせむとす！】

このように書き写してみますと、まるで一首の絶妙な新体詩となっています。どうでしょう。この詩は科学の精神を頗る含んでいます。彼は地球が太陽の周りを回っていることを知りませんでした、大地が円いことを想像していました。神話、伝説を彼は信じませんでした。ただ自然に帰依していただけでした。僕は特にその最後の一句が好きです。それこそ「我与天地並生、与万物為一」【我は天地ともに生き、万物とともに一となる】「Substantia sive duos, duos sive natura」(本体即神、神即万物)ではありませんか？

『学灯』欄【上海の新聞『時事新報』の「文芸欄」。当時、宗白華はその編集を担当していた】は僕が最も愛読しているものです。近頃ほとんどそれに依存してきています。わが国の新文化運動の出版物は、『学灯』以外一つも持っていません、買うだけのお金もないのです。

僕たちは、今「医学同志会」という団体を組織しています。我が国の不合理な旧医学（少なくとも多くの部分が学理に合いません）、迷信的な旧観念、弊害の積み重なった旧社会を打破し、転覆させ、解放し、改造するのです。『医海潮』という雑誌を発行し、

新医学の精神を闡明し、宣伝し、公開し、普及しようというのです。全人類社会を救済しようという僕たちの目的を達成し、それを通じて、文化運動の一つの「分功」【貢献の一部】としたいのです。しかし残念ながら、僕たちの同志は少なく、資本もありません。僕たちの運営はまだしばらく具体的な行動に移せません。もしそれが動きだした時には、僕も専門以外の文を書くことがさらにできなくなります。

要するに、僕は『学灯』を最も愛する者です。僕は努力するつもりです。全身の血液を『医海潮』の中の水にし、全身の脂肪組織を『学灯』の中の油にしたいのです。

ここまでにしめます。それでは、それでは！またこの続きをやりましょう！

郭 沫若 九、一、一八。

【民国9年1月18日】

補注

1 この手紙は解説にも書いたように、1920年1月3日宗白華が郭沫若に宛てて書いた手紙の返書である。冒頭の語は、宗が「君の詩は僕の最も愛読するものです。君の詩の境界（世界）は、僕の心中の境界です。・・・(中略) 君の詩は僕の詩意を代表しているといってもいい、僕の詩だとみなしてもいい」と書いていることへの反応である。

2 宗白華は、上文に続けて、自分はこれまで「心中の詩意、詩境がなければならないが、必ずしも作る必要はないと主張してきた。だから詩稿は形にせず、葬り去ってきた」と書いている。

3 熊本学園大学・堀正広教授のご示教によれば、シェリーのこの言葉は「私は詩を作る、などとは誰にも言えない」という意味だが、「詩というものは、人が「作る」ことのできるものではない。人は、ある別の次元に存在する「詩」を書き出すことができるだけだ」という考えを前提にしているもののようである。これは郭沫若の「詩は作るものではない。書き出すものだ」という言葉と符合する。シェリーのこういう詩観と郭沫若のそれとの関連については、日

本ではまだ言及がないように思う。

*本文中に訳者注として書き加えたものを【 】内に記した。

*郭沫若旧詩の訓読は平木康平（大阪府立大学名誉教授）先生にご示教を賜った。郭沫若文中の難解な中国語の語彙について、熊本学園大学・石汝傑教授のご示教を賜った。ドイツ語の日本語訳は、上村直己（熊本大学名誉教授）先生のご教示によるものである。シェリーに関する堀正広教授のご教示と合わせ、先生たちのご厚意に感謝申し上げる。

解説：本文の翻訳について（岩佐昌暲）

本文は郭沫若の宗白華宛書簡の翻訳である。底本は1920年5月上海亜東図書館（「図書館」は出版社のこと）出版の『三葉集』（田漢・宗白華、郭沫若著）、ただし、ここでは1982年6月上海書店から出たその復刻本を用いている。脚注部分は『郭沫若全集』文学篇 第15巻（人民文学出版社 1990年7月）所収の『三葉集』の孫玉石（北京大学教授）注に従った。ただし、一部内容を改めたり、増やしたりした箇所がある。

『三葉集』は郭沫若、田漢、宗白華の往復書簡集である。初めにこの三人についてごく簡単にプロフィールを紹介しておく。

まず郭沫若（1892－1978）。前号で紹介したが、四川省楽山の出身。九州帝大医学部在学中の1921年出版した詩集『女神』によって中国ロマン主義詩の旗手として名をはせた詩人。日本留学生が東京で結成した文学結社・創造社の中心メンバーであり、中国の革命文学の理論的指導者でもあった。28年蒋介石と対立して日本に亡命、千葉県市川市で十年に渡る亡命生活を送った。37年日中戦争が始まるや秘密裏に帰国、抗日民族統一戦線における文化面の指導者として活躍した。45年中華人民共和国成立後、副総理となり、また文化界の諸組織のトップとして建国後の中国文化界を牽引した。78年文革が終わり「新時期」が始まろうとするとき逝去した。

田漢（1898 - 1968）は湖南省長沙の人。郭沫若と同時代に日本に留学、東京高等師範に学んだ。21年郭沫若とともに創造社の創設に関わった。在学中の20年から劇作を始め、22年帰国後演劇、映画の世界で活躍、中国現代話劇の創始者とされる人物である。建国後は中央政府の芸術事業管理局長のほか作家としても中国戯劇家協会主席を務めるなど、中国の演劇、映画界の発展に尽くした。文革期に批判され、獄中で逝去した。

宗白華（1897－1986）は安徽省安慶の生まれ。上海同済大学を卒業、20年から25年までドイツに留学、美学、哲学を学び、帰国後は中央大学（後の南京大学）、建国後は北京大学で美学を講じた。20年代には小詩運動の実践者で『流雲集』という詩集がある。

『三葉集』はいま触れたようにこの三人の往復書簡集である。この三人がどのように知り合い、手紙を交わすようになり、またそれが書簡集として刊行されるにいったか。簡単に経緯を述べると以下のようである。

郭沫若は19年9月から上海の新聞『時事新報』副刊『学灯』に詩を投稿し始め、それが次々に掲載されたことから詩作熱にとりつかれる。このあたりのことは本誌前号掲載の「私の詩作の経過」に述べられているので省略するが、当時無名の医学生に過ぎなかった郭沫若の詩を認め、積極的に掲載したのが『学灯』編集責任者だった宗白華だったのである。宗白華は20年1月3日郭沫若に手紙を送り、彼の詩才に賛辞を捧げるとともに、東京留学中の田漢を紹介し、二人の「東方未来的詩人」が交流するよう希望した。宗は郭沫若からの返書（それが今回翻訳したものである）を受け取ると、その返書と郭の詩を同封した手紙を田漢に送り、郭を紹介した。

これより前、中国では日本の中国侵略に反対する青年、学生の愛国運動が盛んであったが、その運動を積極的に進めた団体に少年中国学会（この団体は18年から活動を始めたが正式に成立したのは五四運動後の19年7月）があり、『少年中国』という機関誌を発行していた。田漢と宗白華はその会員で、お互いに知り合いだったのである。田漢は、『少年中国』誌上に、郭沫若が手紙の中でも触れているホイットマンを紹介するな

ど、論客としてすでに知られていた。宗白華は『学灯』で働くようになるや、編集者として才能ある書き手を発掘すると同時に、若い書き手同士を結びつけることに喜びを感じていたように思われる。宗は郭の投稿の少し前から『学灯』の編集に当たり、翌20年3月、ドイツ留学のため上海を離れるまでその任にあった。この三人の交友はその後も続くが、編集者と執筆者としての通信は、これをもって終わりを告げる。その二ヶ月後の5月『三葉集』が出版されが、これは田漢が企画編集したものだった。

田漢はその序文で、「手紙を書いていたときには、発表しようという気はなかった」と述べている。だが手紙の交換が増えていくうち内容も多くなっていく。田漢によれば「だいたいゲーテを中心にしていたが、ほかに詩論、近代劇、結婚問題、恋愛問題を論じたもの、宇宙観や人生観を論じたものもあった」。

それを往復書簡集として出版しようとした理由は何も書かれていない。(宗白華の序文では、この本を出版する目的は「婚姻問題」の解決に資することだと述べている。)しかし田漢序文の最後が「本書に収めた書信は、前後を合わせれば例えば一卷の『若きウェルテルの悩み』のごとくである。ゲーテがそれを発表するやドイツの青年の中でウェルテルブームが巻き起こった!『三葉集』が出た後には、我が国の青年の中に、必ずや三葉ブームが大いに起こるであろう」という語で結ばれていることから、彼らが五四以後の中国青年に、問題提起を行なおうとしていたこと、またその問題提起が大きな反響を呼ぶと確信していたことが窺える。

事実、田漢の豪語したように『三葉集』は当時の青年たちに受け入れられたようで、郭沫若も『三葉集』は出版後かなり当時の歓迎を受けた(『創造十年』)と書いている。余談だが、田漢は『三葉集』の評判が高かったので別の友人を入れた往復書簡集『新三葉集』を出そうと計画したが、郭沫若から断られている(『創造十年』)。以て彼らの問題意識が五四運動によって喚起された青年たちの精神に呼応する新しい観念・視点をもつものだったということが知られる。五四時期精神史の重要な資料ともなるものである。

書名の『三葉集』の「三葉」はクローバーKleeblattのことで、田漢は「クローバーは普通三人の人間の友情の結びつきの象徴として用いられる」ことが書名の由来であると説明している。

ところで、われわれがこれを翻訳するのは、郭沫若への関心からである。具体的にはこの本に20年1月から3月という時期の郭沫若の文学観や、心情が率直に語られているからである。この時期の郭の思想(汎神論)や詩作については『創造十年』に整理された記述があり、また前号で翻訳紹介した「我的作詩的経過」のような回想記がある。だがそれらはいずれも後に書かれた文章であり、この手紙がもっているような生々しさ、迫力といったものに欠けている。勿論、執筆された時期が書かれている内容の真実性を保証できるわけではない。むしろ後に冷静に振り返る方が、当時の心情を正確に記述できているということもあるだろう。しかし『三葉集』に書かれている心理的「事実」(それとて本当に事実かどうかは分からないのではあるが)や「文学観」(というより「詩観」と言う方がいいか)などには執筆時期の郭沫若の心情の真実が含まれているように思う。

今回訳出した手紙で言えば、彼が自分について「ああ!要するに、白華兄、僕は「人」ではない、僕はダメになった人間です。僕は君が「敬服」するに値しない人間です。」と書いている個所、これは彼が故郷に妻のいる既婚者でありながら、佐藤富子(をとみ)と肉体関係をもってしまったこと(これについて郭沫若は『三葉集』所収の2月15日付田漢宛の手紙でその内心の苦痛を告白している)を指していると思われるし、その直後の「僕はいまとてもPhoenixのようにになりたい。香木を拾い集めて、僕の今もっている形骸を焼却し去り、哀切な挽歌を歌いながら、それを焼却し去り、その清く冷たくなった灰の中から「僕」を再生させるのです。」というのは『女神』の重要な作品「鳳凰涅槃」の核心的なテーマ(再生)の要約である。私小説的な読み方をすれば、「鳳凰涅槃」は郭沫若自身がこの時期、楽山の張夫人と佐藤富子との二重結婚という心理的な泥沼を断ち切って、新しく再生したいという願いをこめたものとも言える。そして「鳳凰涅槃」で描かれる再生と異なり、現実の郭沫若は「しかし、それもついには一つの

幻想に終わるのではないかと「恐れている」のである。

ところで、邦語の研究で、『三葉集』にみられる当時の郭沫若の心理的葛藤を考察したものに、武継平福岡女子大教授の『女神』論（「新旧軌詩および『三葉集』から見た『女神』」、『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代』九州大学出版会、2002年12月所収）がある。武教授はその葛藤を、楽山の張夫人への「贖罪意識」と佐藤富子への「懺悔」意識として論じており、なかなか重要な指摘である。ただこれは同教授の著書の一節であるため、十分に述べられていない憾みがある。今後、機会があれば専論として展開してほしいものである。

「鳳凰涅槃」は、郭沫若自身が「中国の再生を象徴している」と書いていることもあり「旧世界の暗黒を撃ち、中国の再生を願う」詩という理解が一般的である。だが作品は20年1月20日、つまりこの手紙の二日後の日付で発表されており、創作当時の心情から言えば、上に「私小説的読み方」として述べたことの方が実情にちかいのではないかと私は考えている。

『三葉集』にはこのほかに郭沫若が佐藤富子と知り合い、恋愛し、岡山で同棲するに至った経緯、それを「罪悪」「苟合【野合】」と呼んで激しく後悔する心情なども書かれていて、当時の郭沫若の感情生活を知る好個の材料にもなっている。

また文学観（詩観）についても『三葉集』には当時の郭沫若の考えがさまざまに述べられている。やはり今回の手紙で言えば、彼の有名な「詩不是“做”出来的、只是“写”出来的」【詩は「作」って出来るものではなく、「書き」だすものだ】というものがある。宗白華への説明を読むとこの言葉は、詩というものはすでに宇宙に目に見えない形で存在しており、詩人は宇宙空間にさまざまに存在する無形の詩に言葉で形を与えるだけだ、という意味だということが分かる。また、補注3でも触れたように、それはシェリーの詩観と符合しており、ゲーテのそれとも類似していると郭沫若が考えていたことも分かる。彼は『雪萊詩選（シェリー詩選）』（泰東図書局、26年3月）を刊行しているが、その序文（「雪萊詩」小引、23年2月『創造季刊』1巻4号掲載）で「シェリーは私の最も敬愛する詩人の一人である」と書いており、シェリーは彼のお気に入りの詩

人だったことが分かる。だが、『創造十年』にはこの時期のシェリーとの関連には一言も触れられていない。郭沫若の詩観へのシェリーの影響といった問題について、大陸では研究があるが、我が国でこのことに言及した研究があるのかどうか、不勉強でよくわからない。個人的には調べて書いてみたいテーマである。

さらに後に詩集に収められる作品が、発表前の形で出現したり、天才論、汎神論など郭沫若研究のトピックになる資料が、個人の心情吐露の形で出てくる。後の整理された視点からではなく、荒削りの素材のまま含まれているのである。重要なのは、この時期、郭沫若は文学者としてはまだ無名の貧しい留学生にすぎなかったということである。『三葉集』はまさに詩人・郭沫若の誕生の過程を示す資料と言える。

このように『三葉集』は郭沫若研究にとって貴重な資料を含む重要な文献である。だが残念なことにこの文献は十分に活用されているとは言い難く、不勉強な私の目に入った邦語文献としては（見落としがあればぜひご指摘いただきたいが）、前述の武継平論文しかない。本稿が日本における郭沫若文学、とりわけ『女神』研究での『三葉集』の資料的価値の見直しのきっかけになればうれしい。

この翻訳は前稿（「我的作詩的經過」）と同じく岩佐が顧文（雯）に勧めて成った。翻訳作業は訳注を含め顧文（雯）が行ない、日本語表現に岩佐がごくわずかの修正をほどこしたほかは、訳者のものであること、前回と同じである。（2013年1月）